学校プリンセス！

城戸　輝零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
学校プリンセス！

【Ｎコード】
Ｎ６８５２Ｏ

【作者名】
城戸　輝零

【あらすじ】
私は、姫華高等学校に入学しました。この姫華学校では、毎年、1、2、3年生から一人ずつ選ばれます。選ばれると、芸能界デビューが決まります。私は昔から、芸能界に憧れていたので、私は、可愛くなるために頑張ります。もう一つ夢があります。
その夢とは、山本　夕星君に片思いをしているので、付き合いたいです。・・・

みすぼらしい私（前書き）

作『よろしくお願いします』

みすぼらしい私

私は、菊池（きくち）　咲姫（さき）高校1年生で、入学したばっかり
今年の、学校プリンセスを目指して、この姫華高等学校にはいりました。
校長『みなさん、おはようございます。今年の、学校プリンセスが決定しました』

生徒達『わー』

校長『まず、1年生から』

咲姫『私にしてください』

校長『投票の結果、1年生は、菅原　奈緒さんに決まりました』

奈緒『わ、私？』

咲姫『いいなー、私なりたかったなー』

かんな『あんたなんか、なるわけないでしょ、そんな、みすぼらしい顔で』

奈緒『かんな！！！言いすぎだよ、かわいそうじゃん』

かんな『あっそ、好きにすれば』

咲姫『？』

奈緒『大丈夫？、かんな本当は悪い人じゃないんだ、そういえば、あなたの名前は？』

咲姫『菊池　咲姫です』

奈緒『咲姫ちゃんね！！！いいなー名前に『姫』って字が入ってて、いかにもプリンセスって感じじゃん』

咲姫『え』―（学校プリンセスに選ばれた人が、以外だな）

奈緒『ねえ、友達になろうよ、私、菅原　奈緒よろしく』

咲姫『あの、もう校長先生に言われてたから分かるんですけど』

奈緒　『あっ！そっか、咲姫って、頭良いね』

咲姫『全然』

奈緒『今日の席替え一緒になろうよ』

咲姫『いいの？』

奈緒『いいに決まってんじゃん』

（奈緒ちゃんは、男子にも女子にも人気があって、席も近くになれないぐらいなのにな）

（こんな、私と話していて、楽しくないのに一緒にいていいのかな？）

咲姫『はぁ』

ガラ・・・

先生『授業始めるぞ』

日直『起立、礼、着席』

先生『今日から、君達、１年Ｃ組を担当する舟越　純平だ』

先生　『えっと、今日は席替えをします』

生徒『わーぁぁ』

日直　『静かに、静かに』

先生『今日は、好きなところを選んでいいぞ！！！　＞

生徒　＜やったー＞

かんな『ねえ、男女隣同士座ればいいじゃない』

生徒　『それも、いいねー』

こうして、男女が隣の席になれることが決まった。

かんな『私は、夕星君と隣になりたいわ』

奈緒『咲姫、残念だったわね、今度こそ、隣の席になりましょうね』

咲姫『うん、奈緒』

奈緒『今、奈緒って呼んだ?、初めてだわ嬉しい、みんな、奈緒ちゃんとか、なっちゃんとか呼んで来るんだもん、新鮮』

咲姫『よかった、』

先生『隣は、俺が決めていいか、　』

生徒『えええええー』

先生『もう決めちゃうからね、じゃあ、忘れ物が多い奴、手を上げなさい　』

夕星君と、田中君って言う人が手を上げた。

先生　『夕星と、田中だな、じゃあ夕星の隣は、しっかり者の、咲姫がいいな』

咲姫『へ?』

先生『寝ぼけてたのか、お前は、夕星の隣だ、』

かんな『先生!!なんでですか、私のほうがしかっり者ですよ』

先生『そうかそうか、じゃあお前の隣は田中な』

かんな『ひどーい、よりにもよって、田中　灯斗士なんて』

先生　『そういわない』

先生『では、授業を終わります、それに、休み時間に机を変えておくように』

がら・・・・

奈緒　『いいな、咲姫は、私なんて、木村よ』

咲姫『別に？』

夕星『よろしく、あと、中学校の時の、俺が擦り傷した時咲姫ガつけてくれた奴なかなか返せなくて』

咲姫『へ？そんなのあったけ、』

夕星『これ』

咲姫『あっこのハンカチだったのか、ありがと』

夕星『うん』

がら・・・・

先生　『授業を始めるぞ！！、』

夕星　『先生、おれ、教科書忘れてきてしましました』

先生　『だらしない奴だな、はぁ～咲姫に見せてもらえ』

夕星『はーい　』

夕星『見せて』

咲姫　『うん、どうぞ　』

先生　　『夕星、罰として、ここ読んでみろ！！』

夕星『はい、枕草子第一段

春はあけぼの。やうやうしろくなりゆく山ぎは、少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり、やみもなほ。蛍の多く飛びちがひたる、また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くも　をかし。雨など降るも　をかし。

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、からすの寝所へ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。まいて、雁などの連ねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、火など急ぎおこして、炭持て渡るも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりてわろし。』

先生『よし、次の第三十七段も読んでみなさい、』

夕星『三十七段

木の花は、濃きも薄きも紅梅。桜は、花びら大きに、葉の色濃きが、枝細くて咲きたる。藤の花は、しなひ長く、色濃く咲きたる、いとめでたし。

四月のつごもり、五月のついたちのころほひ、橘の葉の濃く青きに、花のいと白う咲きたるが、雨うち降りたるつとめてなどは、世になう心あるさまにをかし。花の中より黄金の玉かと見えて、いみじうあざやかに見えたるなど、朝露にぬれたるあさぼらけの桜に劣らず。ほととぎすのよすがとさへ思へばにや、なほさらに言ふべうもあらず。

梨の花、よにすさまじきものにして、近うもてなさず、はかなき文つけなどだにせず。愛敬おくれたる人の顔などを見ては、たとひに言ふも、げに、葉の色よりはじめて、あいなく見ゆるを、唐土には限りなきものにて、文にも作る、なほさりともやうあらむと、せめて見れば、花びらの端に、をかしきにほひこそ、心もとなうつきためれ。　楊貴妃の、帝の御使ひに会ひて泣きける顔に似せて、

「梨花一枝、春、雨を帯びたり。」

など言ひたるは、おぼろけならじと思ふに、なほいみじうめでたきことは、たぐひあらじとおぼえたり。

桐の木の花、紫に咲きたるはなほをかしきに、葉の広ごりざまぞ、うたてこちたけれど、異木どもとひとしう言ふべきにもあらず。唐土にことごとしき名つきたる鳥の、えりてこれにのみゐるらむ、い

みじう心ことなり。まいて琴に作りて、さまざまなる音のいでくるなどは、をかしなど世の常に言ふべくやはある、いみじうこそめでたけれ。

木のさまにくげなれど、楝の花いとをかし。かれがれに、さまことに咲きて、必ず五月五日にあふもをかし』

先生　『よく、練習しているな、また当てるからな』

夕星『疲れた』

咲姫『すごいよ、夕星くん』

夕星『咲姫あのな、中学からの同級生なんだから、夕星って呼べよな』

咲姫『分かった、』

先生　『じゃあ、次、咲姫、百六段を読みなさい』

咲姫　『はい

二月つごもりごろに、風いたう吹きて空いみじう黒きに、雪少しうち散りたるほど、

黒戸に主殿司来て、

「かうてさぶらふ。」

と言へば、寄りたるに、「これ、公任の宰相殿の。」とてあるを、見れば、懐紙に、

少し春ある心地こそすれ
とあるは、げに今日のけしきにいとようあひたるも、これが本はいかでかつくべからむ
と、思ひわづらひぬ。
「誰々か。」と問へば、「それそれ。」と言ふ。みないとはづかしき中に、宰相の御
いらへを、いかでかことなしびに言ひいでむと、心一つに苦しきを、御前に御覧ぜさせ
むとすれど、上のおはしまして大殿籠りたり。主殿司は、
「とくとく。」
と言ふ。げに遅うさへあらむは、いととりどころなければ、さはれとて、
空寒み花にまがへて散る雪に
と、わななくわななく書きて、とらせて、いかに思ふらむとわびし。
これがことを聞かばやと思ふに、そしられたらば聞かじとおぼゆるを、
「俊賢の宰相など、『なほ内侍に奏してなさむ。』となむ定めたまひし。」
とばかりぞ、左兵衛督の中将におはせし、語りたまひし。『
先生『うまいぞ、ちゃんと練習をしているな』
夕星　『うまいじゃん』

『みなおしたよ』

先生『じゃあ、次かんな』

かんな『はい、

正月十よ日のほど、空いと黒う雲も厚く見えながら、さすがに日はけざやかにさし出でたったたるに、えせ者の家の荒畑といふものの、土うるはしうも直からぬ、桃の木の若だちってって、いとしもとがちにさし出でたる、片つかたはいと青く、いま片つかたは濃くつややかにて蘇芳の色なるが、日影に見えたるを、いと細やかなる童の、狩衣はかけ破りなどして、髪うるはしきが、登りたれば、引きはこえたる男児、また、小脛にて半靴履きたるなど、木のもとに立ちて、「我に毬打切りて。」など乞ふに、また、髪をかしげなる童の、袒どもほころびがちにて袴なえたれど、よき袿着たる、三、四人来て、「卯槌のきききき木のよからむ、切りて下ろせ。御前にも召す。」など言ひて、下ろしたれば、ばひしらがひ取りて、さし仰ぎて、「我に多く。」など言ひたるこそをかしけれ。

黒袴着たる男の走り来て乞ふに、「待て。」など言へば、木のもとを引き揺るがすに、危ふがりて、猿のやうにかいつきてをめくもをかし。梅などのなりたる折もさやうにぞするかし。』

先生　『かんな、ちゃんと毎日練習をしているのか？、』

かんな『しています』

先生　『じゃあ、もっとうまいはずなのにな、普通だったら、咲姫や夕星みたいに、うまいのにな、』

かんな　『・・・・・』

咲姫　『先生！言いすぎですよ、かんなはちゃんと毎日練習しているんです、でも、学校で先生や友達の前で読むのは、恥かしいですし、間違えて当たり前のことなんですよ』

奈緒『私もそう思います』

先生『すまんな、かんな先生いいすぎた』

かんな『いいです別に』

『咲姫、ありがとう、私の本当の事言ってくれて、私恥かしくて、もうだめだったの本当にありがとう！！！！！』

咲姫『私は何もしてないよ、本当の事を言ったまでだもの、じゃあね』

こうして、かんな、夕星とも仲良くなった咲姫でした。！

みすぼらしい私（後書き）

作『ありがとうございました』

学園祭の出し物決め

咲姫『だるーい、奈緒助けて』

奈緒『次の時間なんだっけ？』

咲姫『私の話聞いてる？、まあいっか奈緒次の時間は、学園祭の出し物を決める時間だよ忘れたの？』

奈緒『そうだ、何やりたい？』

咲姫『お化け屋敷か～、お店屋さん？』

奈緒『やっぱ女子はそうだよね、男子は『サッカー対決、』とか言ってるよ』

咲姫　＜まじで、それやだーーーーーー』

がら・・・

日直『起立、礼、着席』

先生　『この時間は、学園祭の、出し物を決める時間だ、いい意見があったら、言ってよな』

かんな　『はーい、メイド喫茶がいいと思います』

男子『俺らも、なれっていうのか？』

男子『じゃあ、サッカー対決は？』

奈緒　『女子の事も考えてよね』

夕星　『まあ、隣のクラスの先生が来ちゃうよ！！じゃあ、お化け屋敷とか、料理屋さんはどう？』

女子　『それがいいよー』

咲姫『私も、いいと思うけど、男子はどう思う』

男子『そんなに、言うなら、先生！！！半分は、お化け屋敷で、半分は、料理屋さんをやりたいと思います』

先生　『じゃあ、このクラスは、これで、決まったな』

放課後・・・

咲姫『奈緒帰ろう』

奈緒『いいよ！！それに、男子も混ぜたほうがおもしろいから、夕星とか、呼ぼうか！！　』

咲姫『うん！！夕星～～～』

奈緒『聞こえないみたいだね』

咲姫『それは、それで悲しいな』

奈緒　『もう、可愛いんだから！！』

夕星『さっき、呼んでなかった？　』

咲姫　『呼んでたけど、一緒に帰らないかなと思って』

奈緒『私も帰るけどね　』

夕星『喜んで、一緒に帰らせてもらうよ　』

・・・

この三人は、一緒に帰ったのであった、

奈緒『じゃあ、家こっちだから、じゃあね』

咲姫　『奈緒！！！帰らないでよ二人で、何話したらいいか分からないよ　』

奈緒『頑張ってね、』

夕星　『咲姫、帰るぞ　』

咲姫　『うん　＼＼＼＼＼　』

夕星『あのさ、今度の日曜日会える、だって、お前の誕生日だろ、どっか連れて行ってやるよ』

咲姫『日曜日は、一応空いているけど、いいよ、何処もつれていき行ってもらわなくて』

夕星　『俺が連れて行きたいんだよ　』

＼＼＼＼＼

メールと、遊園地・・・・

咲姫『あっ！！！夕星から、メール来た！！！

ど、手つないでくれないかな？？？？？？『

咲姫『う～ん？どうしようかな？じゃあ、つないであげる』

よっしゃ～～～～～～～

電車に乗り、やっと、遊園地に着いた・・・・・

夕星『入っていいよ！！！！！』

咲姫『あのさ～私、観覧車に乗りたい』

・・・・・・・・・・・・

夕星『そういう時は、最後に乗ろうよ』

いい事いうね～

咲姫『うん！！！！！まず、何に乗る？』

夕星『まずは、ジェットコースターにのろうよ！！！！！』

咲姫『うん！！！！、でも、私、怖いの苦手なんだけど』

夕星『俺居るし、大丈夫じゃん！！！！！』

・・・・・・・・・・・・・

ジェットコースターにのり

天辺から、落ちる時・・・・

咲姫『きゃあああああああああああああああああああ』

夕星『大丈夫、大丈夫』

咲姫『もう駄目！！！無理！！！！！』

夕星『大丈夫？』

心配されて、嬉しかった、咲姫であった

枕草子は、告白の元！！（前書き）

よろしくお願いします

枕草子は、告白の元！！

咲姫『おはよ～夕星』

ゆう『おっはよ～咲姫』

げんきだな～

咲姫『今日って、国語の教科書の下もって来るんだっけ？？？』

ゆう『あ～いっけね！！！忘れた～咲姫みして』

・・・・・・・・・・・・・・まあ、いいけど、許してあげれる範囲・・・・・

業間・・・・・

ガラッ！！

勇人『あの、・・・・咲姫さんは、いますか？？？？？』

咲姫『私ですが、何か？？？』

勇人『ちょっと、来てください』

何？？？　何かくれるのかな？？？＊？＊？＊？

校舎の裏

勇人『あの、時枕草子の教科書忘れた時に、貸してくれたのが、印象的でした。もしよかったら、付き合ってください』

・・・・・・・・・・今のって、告白？？？？

・・・えぇぇぇ

言い訳しなきゃいけないの？？？それとも、奈緒には、本当の事言ったほうがいいの？？？？

まず、言おう

咲姫『奈緒あのね、私、勇人くんに、告白されていたの、ゆうには、黙っててくれない？？？』

奈緒は少し考えてから

奈緒『いいよ！！、分かった、知られたくないんだね』

咲姫『うん』

告白の返事！！！（前書き）

作『読んでくれている皆さまありがとうございます』

咲姫『・・・・・・・・・・・・あっそ』

作『・・・・・・・・・・・・よくそんな変な態度で、告白されたね』

咲姫『失礼な』

作『では、こんな人は、放っておいて、学校プリンセス第５話始まりたいと思います』

告白の返事！！！

咲姫『奈緒、聞いてくれてありがとうすっきりした』

夕星『咲姫！！！あのさ、奈緒と何はなしていたの？？？？相談？？？　』

奈緒言わないで

奈緒『別になんでもないよ！！！！おしゃれの話！！！男子には、関係なしな話です』

ふ～、ゆうだけには、知られたくないからな～

行間

夕星『咲姫！！！！どこ行くの？？？告白？？？』

怒り爆発しますよ！！！！夕星君

咲姫『違いますよ』

ドタドタ・・・・

！？

勇人『咲姫さん、決まりましたか？？？？』

・・・・・・・・・・こんな時に限って

咲姫『今から、勇人くんのクラス行こうとしたのところですよ』

？？？？告白するんじゃなくて、告白されたんじゃないのかな？？？？？？？？？？？？？？？

そしたら、かなりまずいことといったな

咲姫『ここなら、なんですが、屋上行きましょう、この人も居ますしね、噂されたら、大変ですから』

・・そうだな

屋上・・・・・・・・・・

咲姫『返事ですが・・・・、お断り致します、だって、私とあなたじゃ、合わない気がするからそれに、好きな人がいるから』

勇人『はい、分かりました、でも、１つだけ、お願いがあるんですが』

・・・・・・・・・・

最後だし、良いか

咲姫『どうぞ！！！私にできることがあればの話ですが』

勇人『はい、必ず出来ます。えっと、お願いは、これからも、お友達のままで、話すときは、普通に、何事もなかったかのように、

話してください話せなかったら、ちょっといやなので！！！！それが、僕、からのお願いです』

これは、私にもできる！！！

咲姫『はい、そのお願い聞き入れましょう』

教室・・・・・・・・・・・・

奈緒『咲姫！！！！！、あのさ～ホニャララニャララホニャララ』

咲姫『・・・・・・・・・・・・・・・・何行っているのか分からないよ、奈緒』

・・・・・・・・・・・・・・・・

咲姫『いまは、誰の彼女じゃないよ』

！！？？？？

夕星『おっし？？？？』

奈緒『咲姫がすきなの？？？夕星は』

夕星『違うよ』

超照れている、夕星であった

学園祭！！！前の日

学校・・・

あっそっか、双子の弟か彼氏じゃなくてよかった

先生『明日が、学園祭だから、ちゃんと準備しておくように』

学園祭（前書き）

作『よろしくお願いします』

学園祭

学園祭当日

咲姫『いっらっしゃいませ～～～～どうぞ、きてください』

お客『行ってみる？？？』

お客2『行こう！！！！面白そうだしね』

よっしゃ～お二人様～

無線『えっと、何人きますか？？？？』

咲姫『えっと、2人さまです、もうちょっとしたら、クルかもしれません』

無線『了解しました』

ジジジジ・・・・・・・・・

夕星『よっ！！！、咲姫大丈夫か？？？』

咲姫『何が？？？今、夕星も、仕事中なんだから、もう行ってよ、恥かしいよ～～～～～』

・・・・・・・・・・

夕星『じゃああ、後で、一緒に行こうな』

もう、以外に恥かしいよ

お楽しみ

咲姫『そろそろ時間だ、教室に1回戻ろう！！！』

教室・・・・

先生『前半の人は、遊んでおいで！！！、後半の人は、準備しておいてください、休み時間は、あと１０分ですからね』

何か、先生張り切っているな～～～

夕星『行こうよ！！！！！』

奈緒と一緒に行きたいよ！！！

咲姫『私・・・・・奈緒と行きたい、夕星とは、今は、行きたくない』

えっ？？？

夕星『俺きらいなの？？？』

咲姫『違う、たまには、女子と行きたいんだよ、ずっと、夕星とばっかり、いるし変な印象、あるとおもうし』

・・・・・そうか、俺のせいで、咲姫もいい思いをしていないんだ

夕星『いいよ、奈緒たちといきな』

・・・・・

そういったのを聞き届けながら、咲姫は、奈緒のもとへ行った

奈緒『来たの？？？夕と行けばいいのに、いいの？？』

・・・・

咲姫『いいの！！！！ちゃんと、了承とって来たし』

・・・・

奈緒『本当にいいの？？？夕星さがしたら？？多分『自分は嫌われた』って思っていると私は思うけど』

嫌ってないのに

咲姫『私、探してくる』

・・行ってらっしゃい！！

最後の告白

咲姫『・・・・・夕星!!!ドコ??』

咲姫だ

夕星『俺は、ここだけど、奈緒たちと、一緒に行かなかったの??』

それは、行きたかったよ

咲姫『何か、夕星が心配で、それに、奈緒にも『いきな!!!夕星が待ってる』って言ってくれたしいね』

／／／

夕星『咲姫！！！あの！！！付き合ってください！！ずっと、ずっと、好きでした！！！！！！、あの笑顔が可愛くて・・・』

／／／

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6852o/

学校プリンセス！

2011年10月7日23時45分発行